



園長だより



2015年1月7日発行

セブンスデー・アドベンチスト石川教会付属 石川三育保育園

新春を寿ぎ謹んでお慶びを申し上げます。

保護者の皆様にとって、迎えた新しい年が神の恵みに満ち溢れる一年になりますよう、心よりお祈り申し上げます。

親族の結びつきが強い沖縄では、お正月には日頃の感謝の気持ちを「お歳暮」に変えて年始回りするのが一般的です。その際目にするのは、しめ縄飾りや門松ではないでしょうか。どちらも神聖さを表す縁起物です。いずれにしても、人々の長寿や子孫繁栄を願う思いが込められているようです。このような思いはこの時期に行われる催し物にも、はっきりと表されているように思われます。「笑う門には福来たる」のことわざが示しているように、「福笑い」や「初笑い」は正月には欠かせないものになっています。何故、このような「笑い」に頼ろうとするのでしょうか。それは、多くの人々が「笑い」には苦しみや悲しみを希望にかえる不思議な力があることを、経験的に知っているからです。もちろん、この時の「笑い」は、楽しむこと、喜ぶことを表しています。このことを物語るように、「笑い学会」という組織が造られ、様々な研究や活動が行われているようです。これらの研究によると、「笑い」には、心身の健康という効用がもたらされることが分かっています。例えば、体の健康に関しては、免疫力が高まる、自然治癒力が高まる、血液の流れが良くなる、血糖値を下げるという効用です。心の健康に関しては、ストレス解消につながる、(脳が)元気になるという効用です。

しかし、「笑い」が心身に健康をもたらすといっても、「笑い」を持続するということの困難さを誰でも感じているのではないのでしょうか。特に自分で作り出す「笑い」だけに頼っているとしたら、愛する者の病気や死、不慮の事故、自身の病気、事業の失敗、倒産、失業等の人生の危機的状況を乗り越えることは易しいことではありません。何故なら、その時私たちは、深い悲しみや苦しみや痛みで「笑い」を自分で作り出すことができなくなるからです。

興味深いことに聖書は、「悲しみは笑いにまさる。顔に憂いをもつことによって、心は良くなるからである。」(伝道の書 7:3) とあるように、「笑い」よりも「悲しみ」を重視しています。どうやら聖書は、自分で作り出す「笑い」はやがては消え去って無くなる物と位置づけているようです。つまり、本当の「笑い」は、持続するものであると教えているのです。では、本当の「笑い」とは、いったいどのように得られるのでしょうか。「あなたたちは、あなたたちの神の御前に覚えられ」(民数記 10:10) とあるように、神が私たち一人一人の名前を覚えておられることにあると伝えているのです。神が名前を覚えるとは、いつも気にかけておられ、必要な時に必要は助けが与えられるということです。本当の「笑い」とは、作り出すものではなく、自然に湧き上がってくるものなのです。神が、いつも私たちと共にいることこそ、本当の「笑い」の源なのですね。

園長 糸数正義

